

一 次の傍線部のひらがなは漢字で書き、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。
楷書ではつきりとていねいに書くこと。「1点×30」(知識)

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 1 開会せんげんをする。 | 2 無理をしようちで頼む。 | 3 ちんもくを守る。 |
| 4 深こきゆうをする。 | 5 すいり小説を読む。 | 6 けいぞくは力なり。 |
| 7 出口までゆうどうする。 | 8 はくりよくのある映像。 | 9 しぼう校を決める。 |
| 10 きぼの大きな工事。 | 11 ごかいを与える発言。 | 12 えんりよはいらない。 |
| 13 くのうの日々を送る。 | 14 新入生のかんげい会。 | 15 昔話をろうどくする。 |
| 16 こうかい先に立たず。 | 17 どうかくをあらわす。 | 18 どうようを歌う。 |
| 19 やおもてに立つ。 | 20 意気とうごうする。 | 21 努力に報いる。 |
| 22 証人を喚問する。 | 23 決断を促す。 | 24 寄付を募る。 |
| 25 尽力に感謝する。 | 26 画家を志す。 | 27 専ら研究に打ち込む。 |
| 28 半生を顧みる。 | 29 迷路を通りぬける。 | 30 優勝を誇りに思う。 |

問二 次の文法に関する各問いに答えなさい。
一 次の文章の段落・文の数と、傍線部の文節の数を算用数字で答えなさい。「1点×3」(知識)

「食品ロス」という。
食べられるのに捨ててしまう食品がある。それを
「食品ロス」という。
日本では、一日に一人あたり、お茶碗一杯分の食
品が捨てられている計算になる。
今後、「食品ロス」を減らしていくには、食品の
必要量を見直し、買い方を工夫することが大切だ。

問二 次の各文の自立語の数を算用数字で答えなさい。「1点×3」(知識)

- 1 今年は、雪がたくさん降るらしい。
2 私は、毎朝七時に起きます。
3 とても高いビルが建つらしいね。

問三 次の傍線部の文節が修飾している文節を抜き出さない。「1点×3」(知識)

- 1 問題はとても難しい。
2 ひらひらと花びらが舞う。
3 母が朝から外出した。

問四 次の各文の接続語になって文節を抜き出さない。「1点×3」(知識)

- 1 雨が降った。しかし、試合は行われた。
2 明るいので、まだ六時ごろだと思った。
3 この犬は大きい。だから、えさをたくさん食べる。

問五 次の傍線部の独立語の種類を後から選び記号で答えなさい。「1点×3」(知識)

- 1 はい、今すぐ行きます。
2 さようなら、また今度会いましょう。
3 先生、質問があります。
ア 呼びかけ イ 話題の提示 ウ あいさつ エ 感嘆 オ 応答

問六 次の傍線部の文節の関係を後から選び、記号で答えなさい。「1点×6」(知識)

- 1 今日の二時に先生のお宅にうかがいます。
2 祭りは、天気さえよければにぎわうだろう。
3 元気なら、走れ。
4 彼女の助言、それがぼくを立ち直らせてくれた。
5 温かくて大きいのは、私の祖父の心です。
6 旅行先に遠くないところを選んだ。
ア 主・述の関係 イ 修飾・被修飾の関係 ウ 接続の関係
エ 並立の関係 オ 補助の関係

問七 次の傍線部は、文の成分のどれにあたるか。後から選び記号で答えなさい。「1点×3」(知識)

- 1 僕たちは畑でとれた野菜を食べた。
2 明日の朝、外国の豪華な客船がやってくる。
3 雨が上がったので、試合を再開します。
ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 エ 接続部 オ 独立部

問八 次の傍線部の品詞名を後から選び記号で答えなさい。「1点×6」(知識)

- 1 静かな秋の夜。
2 電車内の混雑が激しい。
3 街の人口が増える。
4 私の家の猫はかわいい。
5 ふと名案を思いついた。
6 この文を文節に分けてみましょう。
ア 名詞 イ 動詞 ウ 形容詞
オ 連体詞 カ 副詞 キ 接続詞 ク エ 感動詞

三 次の文章について、後の各問いに答えなさい。

竹やぶのある所へ来ると、トロツコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロツコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。つま先上がりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。その道をやっと登りきったら、今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来すぎたことが、急にはっきりと感じられた。

三人はまたトロツコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走っていった。しかし良平はさっきのように、①おもしろい気持ちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロツコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へ入ると、乳飲み子をおぶったかみさんを相手に、②悠々と茶などを飲み始めた。良平は一人いらいらしながら、トロツコの周りを回ってみた。トロツコには頑丈な車台の板に、跳ね返った泥が乾いていた。

しばらくのち茶店を出てきしなに、巻きたばこを耳に挟んだ男は、(そのときはもう挟んでいなかったが)トロツコのそばにいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがとう。」と言った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあっただらしい、石油の匂いがしみついていた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜を登っていった。良平は車に手を掛けていても、心は他のことを考えていた。

その坂を向こうへ下りきると、また同じような茶店があった。土工たちがその中へ入ったあと、良平はトロツコに腰を掛けながら、帰ることばかり気にしていた。③茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる。」——彼はそう考えると、ぼんやり腰掛けてもいられなかった。トロツコの車輪を蹴ってみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、——そんなことに気持ちを紛らせていた。

ところが土工たちは出てくると、車の上の枕木に手を掛けながら、おぞうさに彼にこう言った。

「われはもう帰んな。俺たちは今日は向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞう。」

良平は一瞬間④あっけにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ母と岩村まで来たが、今日の道はその三、四倍あること、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬこと、——そういうことが一時にわかったのである。良平は⑤ほとんど泣きそうになった。が、泣いてもしかたがないと思った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取ってつけたようなおじぎをすると、どンドン線路づたいに走りだした。

良平はしばらく無我夢中に線路のそばを走り続けた。そのうちに懐の菓子包みが、じやまになることに気がついたから、それを道端へ放り出すついでに、板草履もそこへ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食い込んだが、足だけははるかに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂道を駆け登った。ときどき涙がこみあげてくると、自然に顔がゆがんでくる。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹やぶのそばを駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた。良平はいよいよ気が気でなかった。行きと帰りと変わるせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗のぬれ通ったのが気になったから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織を道端へ脱いで捨てた。

みかん畑へ来る頃には、辺りは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば。」——良平はそう思いながら、滑ってもつまずいても走っていった。

やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事が見えたとき、良平はひと思いに泣きたくなった。しかしそのときもべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。

彼の村へ入ってみると、もう両側の家々には、電灯の光がさし合っていた。良平はその電灯の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水をくんでいる女衆や、畑から帰ってくる男衆は、良平があえぎあえぎ走るのを見ては、「おい、どうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼のうちの門口へ駆け込んだとき、良平はとうとう大声に、わっと泣きださずにはいられなかった。その泣き声は彼の周りへ、一時に父や母を集まらせた。殊に母はなんとか言いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもちながら、すすりあげすすりあげ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三、四人、薄暗い門口へ集まってきた。父母はもちろん、その人たちは、口々に彼の泣くわけを尋ねた。しかし⑥彼はなんと言われても泣き立てるよりほかにしかたがなかった。あの遠い道を駆け通してきた、今までの心細さを振り返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気持ちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子と一緒に東京へ出てきた。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。全然なんの理由もないのに？——塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、⑦薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……………

(「トロツコ」より)

問一 この文章の作者名を漢字五字で答えなさい。〔1点〕(知識)

問二 傍線部①「おもしろい気持ちにはなれなかった」について、次の問いに答えなさい。

1 「おもしろい気持ちにはなれなかった」のは、どのようなことに気づいていたからか。
文章中から八字で抜き出しなさい。〔2点〕(読む)

2 このような変化が表れた良平の心の中の言葉を、文章中から十一文字で抜き出しなさい。

〔2点〕(読む)

問三 傍線部②「悠々と茶などを飲み始めた」土工たちと対照的な良平の様子を表す言葉を、文章中から四字で抜き出しなさい。〔2点〕(読む)

問四 傍線部③「茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている」とあるが、このときの良平の気持ちとして最も適切なものを次から選び記号で答えなさい。〔2点〕(読む)

ア あせり イ 怒り ウ 悲しみ エ あきらめ

問五 傍線部④「あっけにとられた」理由として最も適切なものを次から選び記号で答えなさい。

〔2点〕(読む)

ア 家に帰る方法を思いつかなかったから。
イ 頼りにしていた土工に突き放されたから。
ウ 土工の言葉の意味が分からなかったから。
エ 自分の予想していた言葉と同じだったから。

問六 傍線部⑤「ほとんど泣きそうになった」理由として適切ではないものを次から選び記号で答えなさい。〔2点〕(読む)

ア そろそろ日が落ちて、暗くなってくるころだから。
イ ここから母のいる岩村までは、かなり遠いから。
ウ 帰り道が、今まで歩いたことがないほど遠いから。
エ 一人で、しかも歩いて帰らなければならないから。

問七 良平は板草履や羽織まで脱ぎ捨て、懸命に走り続けたが、そのときの気持ちが最も強く表れた言葉を、文章中から七字で抜き出しなさい。〔2点〕(読む)

問八 傍線部⑥「彼はなんと言われても泣き立てるよりほかにしかたがなかった」理由として最も適切なものを次から選び記号で答えなさい。〔2点〕(読む)

ア 泣かなければ帰宅が遅くなったことをせめられてしまうから。
イ 走り通せた感動で胸が詰まったから。
ウ 大勢に囲まれて不安になったから。
エ 張りつめていた緊張感がほぐれたから。

問九 傍線部⑦「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している」とあるが、これは良平のどんな様子を表しているか。「疲れ」「将来」という語を必ず使い二十五字以上三十字以内で書きなさい。

〔3点〕(書く)

四 次の文章について、後の各問いに答えなさい。

「妙なものだ。チョウを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。僕は小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。

そしてチョウをまた元の場所に刺し、箱の蓋を閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その直後、私が箱をしまって戻ってくる、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「君の収集をよく見なかったけれど。僕も子供のとき、無論、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出をけがしてしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

(中略)

今でも美しいチョウを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、僕はしばしの間、子供だけが感じることでできる、あのなんともいえぬ、貪るような、うっとりした感じに襲われる。少年の頃、初めてキアゲハに忍び寄った、あのとき味わった気持ちだ。また、そういう場合、僕はすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。

(中略)

僕の両親は立派な道具なんかくれなかったから、僕は自分の収集を、古い潰れたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。瓶の栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼りつけ、ピンをそれに留めた。こうした箱の潰れた壁の間に、僕は自分の宝物をしまっていた。初めのうち、僕は自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、他の者はガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼った飼育箱や、その他ゼいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。あるとき、僕は、僕らのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いたときに、得意の余り、せめて隣の子供にだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、①非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。それは子供としては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金の値うちはあると値ぶみした。しかしそれから彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。僕はその欠点を大したものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それで僕は二度と彼に獲物を見せなかった。

(中略)

せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが、収集をしまっている二つの大きな箱を手にとった。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。果たしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれにはりのばされて、クジャクヤマムは展翅板に留められていた。僕はその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを残らず、間近から眺めた。あいにくあの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になつていたので。

②胸をどきどきさせながら、僕は③紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、ピンを抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望を感じて、僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕は針をそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形はくずれなかった。僕はそれをてのひらに載せて、④エーミールの部屋から持ち出した。そのときさしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、僕は階段を降りた。そのときだ。⑤下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということ

を悟った。同時に見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、だいそれた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれちがってから、僕は⑥胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このチョウを持っていることはできない、持っていてはならない、元に返して、できるなら何事もなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということを経験に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分ののちにはまたエーミールの部屋の中に立っていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。クジャクヤママユは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついていているのを、僕は見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰掛けていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、既にこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとって、つらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに、行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。

「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っているもののうちから、どれかをうめ合わせによりぬいてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、他の友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼が僕の言うことをわかってくれないし、恐らく全然信じようもしないだろうということを、僕は前もって、はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがクジャクヤママユをだいなしにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、と語った。僕はそのチョウを見せてくれと頼んだ。二人は上に上がっていった。彼はろうそくをつけた。僕はだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた。

すると、エーミールは激したり、僕をどなりつけたりなどとはしないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」と言った。

その瞬間、僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように、僕の前に立っていた。彼は罵りさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

そのとき初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根ほり葉ほり聞こうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、床にお入り、と言われた。僕にとっては何もう遅い時刻だった。だが、その前に僕は、つと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取ってき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そしてチョウを一つ一つ取り出し、⑦指でこなごなに押し潰してしまった。（「少年の日の思い出」より）

問一 「僕」がチョウ集めのとりこになっている心情が表れた言葉を、文章中から二字で抜き出さない。
〔2点〕（読む）

問二 傍線部①「非の打ちどころがないという悪徳」とあるが、なぜ「非の打ちどころがない」ことを「悪徳」といつているのか。次から選り記号で答えなさい。〔2点〕（読む）
ア 大人がいないときは、失敗ばかりしていたから。
イ 他の子供たちより、話す機会が少なかったから。
ウ 隣に住んでいるのに、遊んでくれなかったから。
エ 子供らしい欠点を感じられず、気味が悪いから。

問三 傍線部③「紙きれを取りのけたい」とあるが、これはどんな気持ちから生じたものか。次から選り記号で記号で答えなさい。〔2点〕（読む）
ア チョウを手に入れたという気持ち。
イ 美しい斑点を見たいという気持ち。
ウ チョウをつぶしたいという気持ち。
エ 挿絵と実物を比べたいという気持ち。

問四 傍線部④「エーミールの部屋から持ち出した」ときの「僕」の心情を表す言葉を、文章中から六字で抜き出さない。〔2点〕（読む）

問五 傍線部⑤「下の方から誰か」が上がってくるのが聞こえた瞬間にわき上がった「僕」の感情を次から選り記号で答えなさい。〔2点〕（読む）
ア 緊張感と困惑
イ 劣等感と後悔
ウ 罪悪感と不安
エ 充実感と恐怖

問六 傍線部②「胸をどきどきさせ」たときと⑥「胸をどきどきさせ」たときの「僕」の心情を、それぞれ次から選り記号で答えなさい。〔1点×2〕（読む）

ア 期待 イ スリル ウ 恥ずかしさ エ 悲しさ オ 不安

問七 傍線部⑦「指でこなごなに押し潰してしまった」ときの「僕」の心情を次から二つ選り記号で答えなさい。〔2点×2〕（読む）

ア エーミールに軽蔑されたのはこのチョウたちのせいだ。
イ チョウを盗んだことを忘れて早く楽になりたい。
ウ 償えないのなら、せめて自分で自分を罰するしかない。
エ これでエーミールになんとか許してもらいたい。
オ 収集はこれで終わりにし、もう二度とチョウ集めはしない。

問八 この作品は、「僕」の傷ついた少年時代の思い出を現在の「客」が語るという構成になっている。このような構成にすることで、作品にどんな効果が生まれているか。六十字前後で説明しなさい。
※六十字前後・・・五十五字以上六十五字以内 〔4点〕（書く）

一 年 組 番 氏 名

点

四						三					二				一												
ハ					五	一	九		六	2	一	七	五	三	一	26	21	16	11	6	1						
る	苦	な	る	大	ウ	熱	る	日	イ	も	芥	一	一	一	一段落	こ	む	後	誤	継	宣						
。	し	っ	と	人	六②	情	不	々	七	う	川	ウ	オ	難	3	こ	く	悔	解	続	言						
	み	て	い	に	ア	二	安	の	命	帰	龍	2	2	い	文	ろ	い										
	で	か	う	な	⑥	エ	を	生	さ	っ	之	3	3	2	4	27	22	17	12	7	2						
	あ	ら	設	っ	オ	三	感	活	え	て	介	エ	ア	舞	文節												
65	る	も	定	た	ウ	イ	じ	に	助	く	二	ハ	六	3	4	も	か	頭	遠	誘	承						
	こ	忘	だ	っ	オ	大	て	疲	か	れ	一	エ	一		二							ら	ん	角	慮	導	知
	と	れ	か	僕		き	い	れ	れ	く	遠	2	2		外							2					
	が	ら	ら	ー		な	る	て	ば	来	3	ア	ア		出							4					
	強	れ	こ	が		満	様	、	ハ	い	す	イ	ウ	四	3	か	う	童	苦	迫	沈						
	調	な	そ	回		足	子	将	エ	い	ぎ	4	4	一	4							え	な	謡	悩	力	黙
	さ	い	、	想		感	。	来		三	た	5	5	し								み	が				
	れ	ほ	大	し				に		い	こ	6	6	2	4							る					
	て	ど	人	て				対		ら	と	オ	オ	明	る	29	め	つ	矢	歓	志	呼					
	い	の	に	い				す		い				い									30	い	の	面	迎
60																											